

Title	青池先生からのおくりもの
Sub Title	
Author	大坪, 寛子(Ōtsubo, Hiroko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2022
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.21- 23
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：青池先生と山岸先生を悼む～あの頃の三田社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

青池先生からのおくりもの

大坪 寛子

私が社会学研究科で大学院生として在籍していたのは、修士課程に入学した 1999 年 4 月から後期博士課程を単位取得退学した 2005 年 3 月までの間である。大学を卒業した時、大学院へ進学したいという希望はあったが、「行きたいならば自分で学費を稼いでから行け」という父の言葉に逆らうこともできず、そのまま民間企業に就職した。紆余曲折を経た後、「念願の」大学院入学を果たした時には 40 歳を過ぎていた。入学当時の三田のキャンパスは、北館ができてまだ間もない頃で、現在の南館も東館もなく、南校舎も、現在とは違い古びた建物だった。大学院棟には院生の研究室があり、やはり古びた机と椅子とロッカーが並ぶだけの部屋だったが、二人共用の机ながらも自分のスペースが与えられたことの喜びは大きかった。

修士課程に入学する前に慶應の通信教育課程に学士入学し、マス・コミュニケーション研究についての卒論を書いて（青池先生には、この時代からお世話になっている）、専門分野に限っては一通りの基礎知識は身に付けていたつもりでいたが、入学後の授業では、かつて大学でかじった知識も古びて使い物にならなくなっていることに気づかされることも多かった。果たしてついていけるのかと不安を感じる時もあったが、新しい知識との出会いは刺激的であり、何とか理解できるようになりたいと、色々な本を読んだ。当時は文化研究が注目を集めており、メディア研究でも、カルチュラル・スタディーズの書籍や論文が続々と登場していた。この頃は出版業界も活気があり、20 世紀から 21 世紀へと変わる節目の時期だったこともあってか、興味をそそられる書籍が次々と出版され、書店で背表紙を眺めているだけでもわくわくした。

この頃の青池慎一先生は、日本社会心理学会第 40 回大会委員長を初め、日本マス・コミュニケーション学会（現：日本メディア学会）の理事など、学会や他の社会的活動で、大変お忙しいご様子だった。「今、重い衣を一枚ずつ脱ぐように、少しずつ身軽になろうと努めている」とおっしゃっておられたのは、2000 年代の半ば頃だったように思う。

そのようにお忙しい中でも、青池先生はゼミを大切にされていた。学部のゼミには私たち大学院生も参加していたが、次々に課題を与えて学生を鍛えていく青池先生と、それにについていく学部ゼミの皆さんの姿に、深い敬意を覚えたものだ。入ゼミ試験を経て青池ゼミに入ることを許可された学生は、まず、春合宿までにウインダールらの『Using Communication Theory』¹⁾が課題として与えられ、新学期が始まると、青池先生らが監訳された E. M. ロジャーズの『イノベーション普及学』²⁾が課題となる。6 月頃からは、小グループに分かれてそれぞれ研究テーマを決めて調査を行い、その結果を夏休み前に発表する。秋学期には、『Communication Research』などの英文ジャーナルから青池先生が選んだ論文が課題として与えられる。一人当たり 2 本は課せられていたように記憶している。

この中でも、毎年 3 月に軽井沢の星野温泉で行われる春合宿は、最も重要な行事だった。3 泊 4 日で行われていたこの春合宿には私たち大学院生も参加したが、入ゼミしたばかりの新 3 年生にとって、今後、青池ゼミの一員として学習活動が続けて行く覚悟を決めるためのイニシエーションの場となっていたように思う。宿に到着するや、間を置かずに発表が始まり、夕食をはさんで午後 9 時から 10 時頃まで続く。翌日も朝から夜まで発表が続き、それが終了

するのは 3 日目の午後 3 時頃である。もちろん、その夜には懇親会、最終日の午前中は青池先生と学部ゼミ生とでの軽井沢の散策、と楽しい交流の時間も用意されているのだが、どのゼミ生もこうした厳しい体験を共有しているからか、毎年 11 月に開催されていた OB・OG 会には多数の卒業生が集まり、青池先生を囲んで盛り上がっていた。青池ゼミを初め各ゼミで展開されるこのような活動によって、慶應の文化は形成され、受け継がれているのだろう。

大学院でのゼミは、各人が自身の研究テーマに沿った発表を行う形で進められた。レジュメの私の文章表現に対し、青池先生から「情緒的、感情的」とのご指摘を受けたことがある。それまで、趣味の会で英語の絵本や児童書を翻訳し、表現力を豊かにすることを目指してきた私の文章には、科学的な学問の文脈ではふさわしくない表現があったかもしれない。自分ではなかなか気づかなかったが、それ以降、文章を書くのに慎重になったことは確かである。

青池先生が常に強調されていたのは、論理展開を明確にということ、そして理論が重要であるということだった。何事にも時間のかかる私は、その重要性を頭では理解しても、自分の論文に、どのように落とし込んでいけばよいのか、なかなかつかむことができずにいた。「色々やっていくうちにわかるようになるかもしれない」と、先行研究を読み進めはするものの、ただ周辺をうろうろしているばかりだった。そんな私に青池先生は、「早く本丸を攻めないと」とおっしゃった。

後期博士課程を単位取得退学した後も、博士論文の執筆は遅々として進まないままだった。社会学研究科の先輩から紹介を受けて非常勤講師として授業を担当するようになると、今度はその準備に追われるだけの日々となった。その当時に授業準備として取り組んだことは、現在も確かな財産として残ってはいるが、論文執筆につながるわけでもなく、心理的にも鬱々とした状態が続いた。

その後、研究者対象ではあったが研究や教育とは離れた期限付きの業務の求人に応募し、就職した。放送関係の団体であったから、自身の研究に少しは役立つかもしれないとの思いもあったが、環境を変えたいという思いの方が強かった。ただ、細々ながらも研究は続けていた。仕事の後はカフェや図書館に通い、論文執筆のための時間に充てた。そんな折に、慶應義塾大学の外部の研究員として研究が続けられる場を与えていただいた。李光鎬先生のお蔭であるが、青池先生からの働きかけがあったとも聞いた。これが本当にありがたかった。両先生に感謝しながら、勤務後はほぼ毎日そこに通い、施錠されるまでの間の時間を論文執筆に充てた。

2019 年 12 月、後期博士課程在籍中に提出した研究計画書とは全く別のテーマで、曲がりなりにも形にして提出した博士論文に、何とか博士の学位を授与していただくことができた。早速、青池先生にご報告とお礼の葉書をお送りした。この報告は、きっと青池先生に届いたと信じているが、学位記をいただいた後に、それをお見せしながらお礼の言葉を直接きちんとお伝えするということは、叶わなかった。

2020 年 1 月 27 日、青池先生の訃報を聞いた時、自分を支えていた大きな柱がなくなってしまったような思いがした。自分自身へのけじめとして、博士論文を書き上げなければならぬとは思っていたが、「学位を得て青池先生にご報告するのだ」という思いが、それを支えていたのかもしれない。今、非常勤講師という立場ではあるが、慶應義塾大学で授業を担当する機会を与えていただいている。私に残された時間は少ないが、青池先生から受けた多くの教えの中から、自分のものにすることができたごく一部のことで、次の世代につないでいくことができれば、と思っている。

【註】

- 1) Windahl, S., Signitzer, B., & Olson, J.T. (1992). *Using Communication Theory: An Introduction to Planned Communication*. Sage Publications.
- 2) 青池慎一・宇野善康 (監訳). (1998). *イノベーション普及学*. 産能大学出版部.

(おおつば ひろこ 社会学研究科慶應義塾大学)